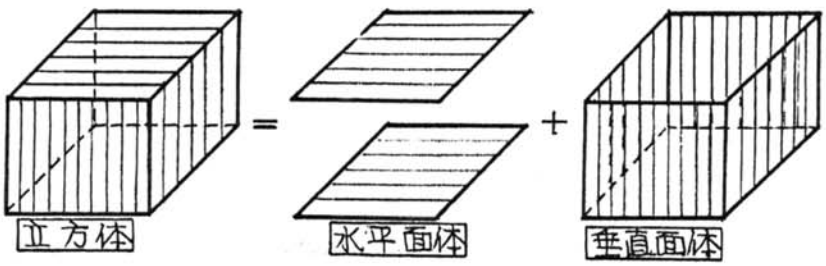
◦▭◦ 木造住宅 「積算ルール」

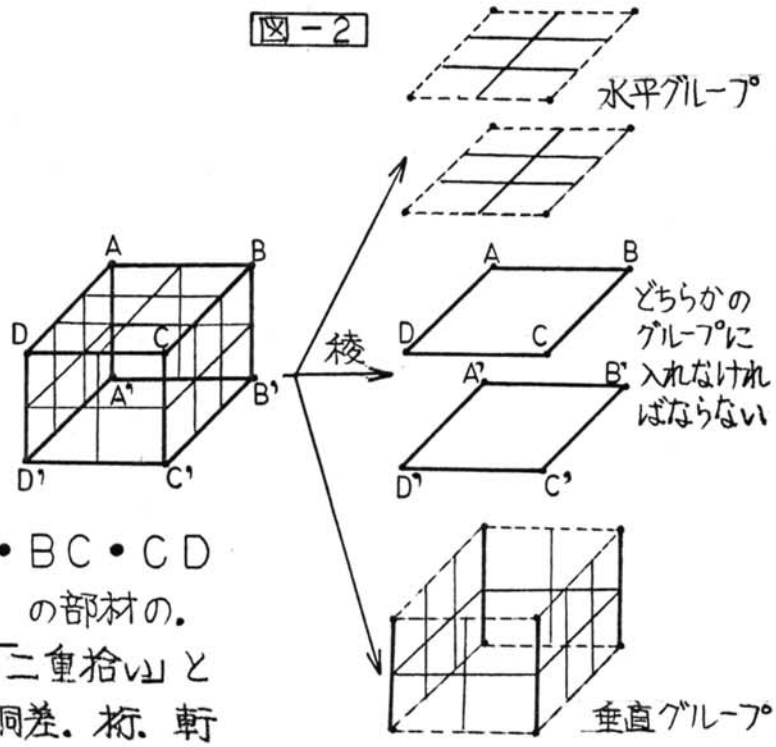
◆ 住空間（建物すべて）は、線の集り。

木造住宅に限らないが、私たちが積算で扱う「空間」は、必ず「面」の構成で、できている。それは特殊な形状でない限り、その面は、水平面か垂直面かのいずれかのグループに属することになる。 更にはその「面」を構成しているものが「線」の集合体である。 したがって、この「線」を拾いあげていく作業が、木造建築での木材の拾いとなるわけである。 その際、この「面」と「面」との接合部、「稜(りょう)」に相当する部分の「線」を水平面か垂直面いずれかのグループに加えて拾う必要がある。

図－1



図－2



さて、図－2に示した「稜」AB・BC・CD・DA、及びA'B'・B'C'・C'D'・D'A'、の部材の、グループ分けを誤ると、これがだぶり「二重拾い」となってしまったりする。 具体的に、胴差、桁、軒桁、妻桁、のような部材がこれに相当する。 これらはちょうど立方体の稜にあたる位置にあたるため、水平面グループの床組の仲間とと考えられるし、柱や間柱などで構成されている垂直面グループ軸組へ入れて考えないことにする。現在の住宅建築で大工(匠工)さんの加工に付いても同様である。

この「稜」にあたる部材（胴差、桁類、添桁(ひうち桁)、力貫(ひうち貫)、）の扱いついては、(現代風建物)で、結論としては部材そのものが水平方向（横架材）にあるという現実を捕えて、これは水平グループの仲間であると割り切ることにする。

◦ なにごとも「割り切り」が必要である。 世の中にはそうそう「割り切れる」ことばかりあるわけではなくどちらかといえば割り切れないことの方が多いのかも知れない。

その割り切れないものを「割り切る」心と「割り切りやすい」ようにもっていく発想が必要なのではなかろうか。 要はなにごとも「ルールづけ」をしてやったらよい。どちらでもいいからといって「ルール」も決めずに放っておくと、たいていの人間は必ず戸惑いと迷いをも考え込んでもまう。 それがまた時間のロスを生む。 「ルールづけ」により、今まで一見面倒くさくて、むずかしそうに見えた「木材の一本拾い」も、やってみれば「案ずるよりも、産むが易い」の諺(ことわざ)どおりということが分かってもらえると思う。